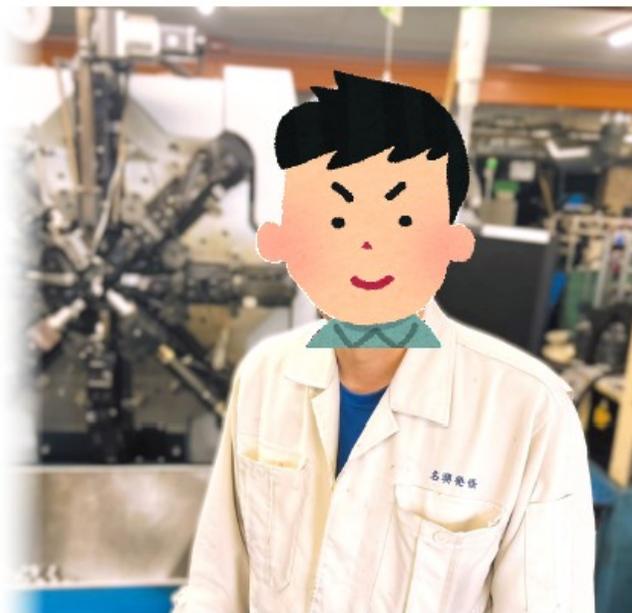


interview

製造G
係長K
さん

勤続32年。培った経験を土台に、今もなお新たな技術の探求を続けている。経験則の通用しない古い機械に向き合う日々。ベテランとなった今も挑戦を止めないその姿勢は、会社の未来と次代を担う後輩たちに向けられている。

32年目の挑戦

80歳近くまで現役を買いた上司が退職したことをきっかけに、その重責を引き継ぐことになった。新たに主担当となったのは、「押しばね」と「引きばね」の加工を担う年季の入った機械。これまでおもに扱ってきた「ねじりばね」とは調整方法が根本から異なり、さらに古い機

械のため、加工に使うツールさえも自ら削り出して作る必要があった。ネジをほんの少しだけ巻く、ツールをほんの少しだけ傾ける。そのように数値化できない、まさに職人の勘だけが頼りの世界。

「今まであまり経験がないもので、今でも苦労しながらやっています」。

さまざまなパターンを試しては調整を繰り返す日々が続いたが、その表情に暗さはない。まず自分がきちんと理屈から理解して道を切り拓き、後進に技術を繋ぐのがベテランに課せられた使命だと考えているからだ。

1本の折れたばねが変えた仕事の流儀

32年のキャリアには、今も記憶に残る転機がある。10数年前の新製品「ロックスプリング」立ち上げ時、顧客に納めたばねが折れてしまうという重大な不良が発覚したのだ。

「ばねの世界で『折れる』というのはあってはならないこと。会社も大騒ぎになりました」。

原因は、ばねを加工するツールにあった。当時は職人が経験と感覚を頼りに手で削り出しており、そのわずかな形状のばらつきが、製品強度に致命的な影響を与えていた。

この苦い経験を機に、仕事の進め方を根本から見直し、手作業で作っていたツールをメーカーと協力して正確にデータ化し、図面に落とし込んだのだ。図面をもとに機械加工で精密なツールを作る体制を築いたことで、誰がやっても安定した品質を保てるようになった。個人の技量に依存したものづくりから、誰もが共有できる「資産」としての標準化へ。この1件が、仕事の哲学を形作った。

裁量と信頼が挑戦を後押しする

32年間働き続けてこられた理由は、「仕事を任せてもらえるから」というのが大きい。大手なら専門部署が担当試作品開発も、ここでは現場が主導。どのような設備でどのように加工するか、基本的には自分で決める。その裁量は重い責任を伴うが、だからこそおもしろく、やりがいも大きい。そして壁にぶつかれば、すぐに相談に乗ってくれる上司や仲間がいる。困ったときはきちんと助けてくれるという信頼関係が、

常に挑戦への背中を押してくれた。互いにカバーし合う風土も、働きやすさに繋がっている。



未来のために技術を磨く

2026年を見据えて掲げる目標は2つ。1つは班長候補の若手を育てること。もう1つは、退職した上司が担っていた、手加工による試作技術の習得だ。1〜2個といった極小ロットの試作品は、量産機では対応が難しい。そこで活躍するのが、職人が手作業でばねを形にする技術という、新規の仕事に欠かせない会社の武器だ。今の自分にはその技術がないため、身につけなければいけないが、師と仰ぐべき先輩はもういない。記憶を頼りに、ときには動画も参考に独学で技術を磨く。

「定年になっても、会社に必要とされる人材でいたい」。

そのような想いが、勤続30年を過ぎたベテランを学びへと突き動かすのだ。

標準化の重要性を熟知する一人の技術者が、職人として新たな技術に挑んでいる。その挑戦が新たなばねを生み出すことで、会社の未来はさらに発展していくだろう。